

ブラジル 2014W杯に、日本 CM 協会を代表して現地観戦した記録です。

協会の重要な職位にありながら、半月以上も休暇を取って、地球の裏側までサッカーの応援に行くなど、まっとうな神経の持ち主である皆さんにはまったく理解しがたいと思いますが、尋常でないサッカー気遣いが現地で何を感じ思ったか、じっくりご覧ください；ー)

尚、この記録中、ビデオ画面再生の場合は、“必ず”“モニター音量レベルを50%以上”に設定の上で再生してください。ですから、執務時間中は、ご遠慮くださるよう；ー)

ここにビデオを貼付けた趣旨は、映像の中身はともかく、私が現地で生身感じた圧倒的な音量の一端を皆さんに感じて欲しい、その音量のただ中に何日間も身を置いて私が何を感じたか、その状況を実体験してほしい、それに尽きるからです。

激動の16日間

地球上で最も遠い国ブラジルへ向け 2014 年 6 月 12 日(木)に成田を飛立ち、同 28 日(土)に羽田に降り立つまでの激動の 16 日間を紹介します。

次の絵は、私が観戦した 4 試合（日本 3 戦とドイツーガーナ戦）の入場チケットです。次の地図とともに私の滞在中の行動イメージをまず把握していただきたいと思います。



最初に、私が今回、16 日間のW杯を現地で堪能できたのは、たまたま息子が今年 2 月にサンパウロに転勤となり、ニューヨークから嫁とともに現地に移り住んだ、この信じられないような幸運のお蔭に尽きると感謝しています。

ブラジル国内は、ホテルでも英語がなかなか通じない世界ですから、フライト・ホテルの手配や現地でのタクシー移動など、ポルトガル語が出来ない日本人が一人で 2 週間も過ごすなど、不可能と言っていいでしょう。

息子にとっても、ともにサッカー気遣いの親子でブラジルW杯を堪能できるという、願ってもない親孝行のチャンスが与えられた、と 2 月に赴任以来張切っており、お蔭で日本戦 3 試合とも現地で息子がチケットゲットしてくれました。



息子夫婦が住むサンパウロのアパートを拠点として、試合会場に長駆遠征して応援しアパートに戻る、サンパウロに居る日は一日3試合のテレビ中継を缶ビール片手に観戦と、正にサッカー三昧の日々でした。(クリックするとビデオ画面になります⇒ <http://youtu.be/lgLURvUnARI>)

ブラジルは、東西・南北とも約4,000キロと大変大きな国なので、試合会場への移動も生半可ではありません。

初戦コートジボアールと戦ったレシフェへは、息子のアパートがあるサンパウロから空路3時間、ギリシャ戦のナタウ（日本ではナタルと発音されていましたが、語尾のLはルではなくウが正しい）へも3時間の移動時間が標準ですが、大手旅行社などに好条件のフライトをまとめて押えられているため、現地で息子がやっと取れた便は深夜や乗継などハードな旅程もありました。

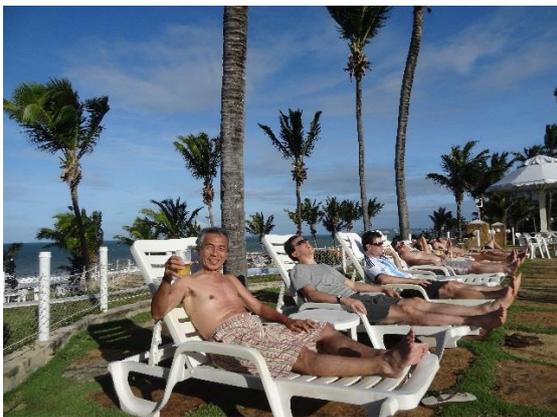
それほど苦労して予約を確保したにもかかわらず、第2戦対ギリシャ戦のナタウからサンパウロへの復路エアチケットは、息子が数日前に確認のところ、コンファームされていないことが判明し、それから2日かけてネットで探し回っても埒が明かず、結局復路未定のままサンパウロからナタウに向かうつもりが、その夜のサンパウロ市郊外の幹線道路大渋滞で、往路便の出発時刻20分後に空港に辿り着くというおまけの事件もありました。

あらためて空港ロビーで、翌日の昼までにナタウへ3人が到着するための手段を求め、息子夫婦がそれぞれタブレットを広げて、ナタウ行きのあらゆるルートを想定してネット検索の結果、コートジボアール戦で5日前に往復したレシフェへの最終便が幸運にも3席取れ、レシフェからナタウへの長距離バス（4時間）も確保して、サンパウロ空港から深夜のテイクオフです。



ナタウでのギリシャ戦の前に

そんなにエネルギーを注いだギリシャ戦のまさかの引分けのショックにもめげず、息子夫婦は投宿したナタウのリゾートホテルのカフェでほぼ半日、当てのない復路便をネット検索し、一方 IT リテラシーの低い私はプールで泳いだり日光浴など思いがけない優雅な骨休めを堪能しました。



ナタウのリゾートホテルで

結局嫁はその日深夜 2 時のフライトでサンパウロに一人戻り、息子と私は翌朝明け方 5 時発で、かねてチケットゲットしていたドイツ・ガーナ戦を観戦に、フォルタレーザまで 9 時間の長距離バスの旅に身を委ねました。



このバスで9時間かけてフォルタレーザへ

父さんドイツお前はガーナ、応援合戦だ

フォルタレーザからサンパウロに戻るフライトが切迫していたため、後半30分でスタジアムをあとにするという厳しいスケジュールでしたが、ご存知のように、優勝したドイツに唯一引分けたガーナとのファイティングスピリット溢れる好ゲームを現場で堪能できました。

<http://youtu.be/CTr4TvcinII>

日本代表は？

帰国後、いろいろな友達から、「大変な旅だったし、日本は残念だったね」と言われました。

確かに大変な旅でしたが、日本代表のこの結果は、旅立つ前に彼等に等しく私が言っていた、「決勝トーナメント進出は無理だと思うよ」、の通りでした。

多分、6月14日（初戦対コートジボアール）敗戦後ほぼ一か月に亘って、様々なメディアでいろいろな論評が展開されたと思い、一々検証するつもりもありませんが、日本の3戦と前述のようにドイツ・ガーナ戦もスタジアムで観戦し、併せて2週間現地に身を置いていた自分が肌で感じた感触で言えば、日本は負けるべくして負けたのです。

闘争心、体幹力、ファウルをも辞さない球際の激しさ、瞬間的なスピード、勝負に対する執着心、大事な場面での決定力、私が直にこの目で見た他の5チームと比べて、どの面でも日本が一段劣っていたというのが、残念ながらの実感です。

コロンビア戦の試合終了ホイッスル直後は、コロンビアサポーターの大歓声でかき消されるため、それが鳴り止んでから、仁王立ちで本田圭介のタオルを掲げてニッポン・ニッポンと大声で孤立エールを送りながら、悔し涙をボロボロこぼしました。

前回南アフリカ大会ではそれほど感じなかった世界との差がこんなに開いてしまった、という悔しさに身を揉まれる思いがし、それが悔し涙になったのだと思います。

そうやってこの歳で孤軍奮闘（？）弱い日本に声援を送り続ける遠来の老人を哀れと思ったか、直後、私とのツーショットを求めるコロンビア人・ブラジル人の行列が長蛇の列となりました。ご覧のように、ここにツーショットに応じながら、「今度は絶対勝ってやるから待ってろよ」と日本語で相手に凄んだ老人でした。

<http://youtu.be/SleBmITHzWQ>



コロンビア戦 前後

その夜、現地話題の食堂で、息子と二人の残念晚餐に舌鼓を打った後、ホテルのベッドで3時に目が覚め、悔しさがまた込み上げて、日本サッカーがどうしたら強くなるのか、悶々と朝6時まで過しました。

その結果、私が到達した答は、欧州各国サッカー120年以上の歴史に比べ、日本のプロ化たかだか20年の現在、そんな、世界に太刀打ちなどと本気で考えることがそもそもおこがましい、川淵チェアマンのJリーグ百年構想の通り、あと80年経てば、日本にも100年の歴史が出来、200年の歴史となる欧州ほかの伝統国に、少なくとも半分までは肉薄できる、現在はそれが六分の一の歴史だから、敗けるのは当たり前、と。

そして息子に、あと80年後に日本が世界とほぼ対等に戦えるようになるために、この悔しさをお前の子・孫・曾孫まで、しっかり伝えて行ってくれよ、と檄を飛ばしたものです。

治安問題

事前にあるいは期間中、日本ではかなりセンセーショナルに報道されていたようです。

私自身も、サンパウロ国際空港で息子に合流してすぐ、べからずリストを刷り込まれました。

曰く、街中でカメラ・時計・現金をちらつかせない、夜間の一人歩きは厳禁、外出時は500リアル（ブラジル通貨で、1リアルは46円ほど）以上のライフマネーを持って出ること、毎日決まった時刻に同じ行動をしない、等々。

でも、結局私の周りには何も起こらず、ピストルも突きつけられなければ監禁もされず、多分金持ちに見えなかったというのが主因でしょうが、無事に生きて帰国することが出来ました；一それは、報道自体が過剰だったのか、たまたま運が良かったのか、定かではありませんが、一つ言えることは、その刷り込みのおかげで、べからずを実践したこと、そのおかげで危険を未然に

防げたのかも知れないということ。

サンパウロの市街を一人で散策する時など、Tシャツに綿パンなどありふれた格好で出、勿論 500リアルは必携で、人気の少ない通りは自然に避ける、そんな意識で 2 週間を過ごしました。

滞在中、実は最も危険に接近していたのかも知れないシーンが一回ありましたが、将来機会があれば、それについてまた紹介したいと思います。

ブラジル戦を愉しむ

スタジアムに足を運んで観戦した 4 試合のほかに、息子夫婦と一緒に、サンパウロでブラジル戦をブラジリアンとともに愉しみました。

サンパウロ市内至る所にあるオープンカフェは、ブラジル戦当日はどこも予約なしでは入れず、ブラジル第 3 戦の対カメルーン戦当日は、息子が数日前から予約で席を確保し、市内有数のカフェで熱狂に身を委ねました。



サンパウロの銀座通り



下の写真とビデオはこのカフェで



<http://youtu.be/PUvIdiqfr6I>

勿論、冷静に試合観戦するブラジリアンも大勢いますが、大騒ぎして試合を楽しむ市民も、結構翌日は冷静に試合を分析したり、だからこそ愉しむときは愉しまなきゃ損、と徹底していると感じました。

<http://youtu.be/2uav4knxN6A>

運営能力

大会施設が未完成のまま開会などと、これも日本などで結構センセーショナルに報道されたことと思います。



第2戦ナタウで スタジアム前の未完成の跨道橋

フォルタレーザでも外壁が未完成

ナタウの競技場前の跨道橋はご覧のように未完成で、まあそのままではまずいので、カラーリングを施したボードで周囲を囲ったりしていましたが、基本、ブラジル感覚はそんなことは二の次であり、はっきり言うとうどうでもいいのです。

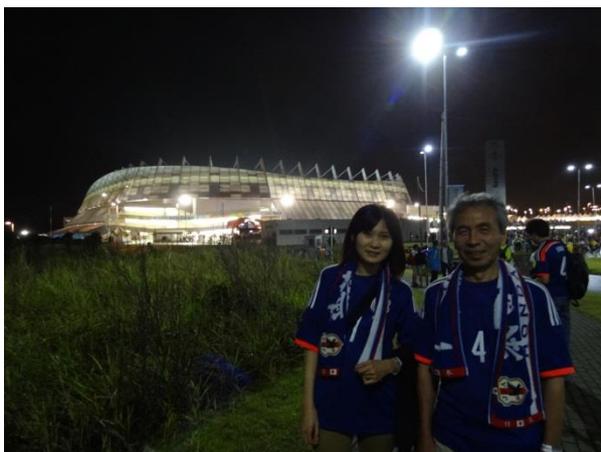
外国からいろんなサポーターが詰め掛けてくるが、結局みんなブラジルに敗れてしょんぼり帰って行くのさ、だから心配ないんだ、極端に言えばそんな雰囲気は充満していたように感じました。

まあそれは言い過ぎですが、万事完璧に準備するのが当然のお国柄と、それを価値観の中心に置かないお国柄との違いがはっきりしていると実感しました。

FIFA から運営を委託されたブラジルサッカー協会の対応にしても、日本の標準で物事を考えては理解に苦しむ場面がいくつも見られました。

日本の初戦、コートジボアールとの夜 10 時キックオフの試合会場に、レンフェ市街から 1 時間かけて HIS のチャーターバスで私たちサポーターが到着したのが午後 7 時半、チェックゲートへの誘導管理が不手際だったため、雨に濡れながら押合いへし合いの末くたびれ果ててスタジアムの指定席に着いたのが 9 時 15 分と、サポーターにとっても試合開始前にかかなりのエネルギー消耗を余儀なくされました。

勿論、その所為で負けたとは言いませんが。



レンフェの競技場 右のシンボルタワーの場所から入場するまで、1 時間半かった

物価など

ブラジル国内航空運賃の異常な高価さに目を瞠りました。

東京・大阪ほどの距離でしかも利用頻度の高い路線が、片道 3 万円です！

滞在中、長距離バスを数度利用しましたが、利用した路線はすべてぎりぎりにチケットを確保できたもので、それだけ一般旅行者の利用率が高そうで、GDP が世界七位とはいえ、まだ庶民の移動手段として空路は正に高嶺の花か、それ故、価格破壊が起きにくい世界なのかと感じました。また、開催地ホテルの料金の高さも半端ではありません。初戦レシフェの二つ星クラスのホテルでシングル 2 万 5 千円、ナタウではビーチリゾートが 1 泊 3 万円です。

総じて、空の旅や観光地でのホテルは、一般庶民の利用対象外のため料金が高めに設定されている、という印象でした。

ブラジル滞在中の移動と宿泊にかかった費用は、サンパウロ以外に居た日数換算で一日一人当たり 5 万 5 千円でした。

庶民対象のように思える朝市なども、場所柄でそれほど安価とは感じませんでした。



サンパウロのアパートから徒歩 5 分の朝市で

トピック

ご覧の写真分かりますか？

コロンビアとの第 3 戦、息子と二人でサンパウロからクイアバに飛んで現地に投宿したホテルでの出来事です。



吉田麻也と酒井宏樹

コロンビア戦クイアバのホテルで

午後 2 時少し前、この日 16 時キックオフの日本代表が、このホテルの回廊を行き来しているところのスナップです。

事前に情報をキャッチしていたわけでは勿論なく、出会い頭のハプニングでした。

1 時にホテル到着時、2 時まではチェックイン不可とフロントで言われ、ラウンジでビール片手にウルグァアイーイタリア戦をテレビ観戦しながら息子に、少し早く入れないか交渉して来いよと言い、1 時半に鍵を手にした息子と 3 階の部屋に上がると、誰かが中でシャワー中（後でこれは大迫だったことが判明）。

慌てて息子がフロントに再度交渉に降りて、私は所在無げに吹抜けの回廊でぼんやりしていると、向う側をご覧の誰かが歩いて来、「あれ、吉田麻耶じゃないか、でもまさか」と思っていると、今度は香川が渡ってくるし、大迫も出てくる。



所在無げな筆者

この警備の意味が後で判った



これ、大迫？

これは香川

川島がそばを通るから、頑張ると声を掛けると無言でうなづく。

エレベーターでフロントに降りようとしたら、2メートル先の岡崎と目が合ったので、「絶対1点！」と親指を立てると、彼だけは持ち前のキャラか、笑顔で「頑張ります」、香川や本田はものすごく重い雰囲気でした。

乗ろうと思ったエレベーターは代表選手で満員、おまけに一番奥にザッケローニのギョロ眼が光っていたので仕方ない、階段を下りて裏口から代表が乗り込んだ貸切バスのスナップを一枚。



ホテルからスタジアムに向かう日本代表のバス

3階には、代表を警備するブラジルサッカー協会のスタッフが何人も居ましたが、私と息子をご覧のようにブルーのレプリカを着ていた為、チーム関係者と思って、往來を制限しなかったのかも知れません。

裏口の警備員も、カメラ片手にバスのスナップを撮りに出ていく私を制止するわけでもなく、総じてブラジル側の代表警備の意識は、日本の感覚と全くずれており、しかもそれがブラジルでは当り前の意識であるのに、日本サッカー協会がそのへんの意識の相違をリサーチできていなかった故の、このあり得ないニアミスだったとつくづく思います。

前述した、日本が80年遅れているという感覚は、選手・監督・コーチ・スタッフなどと個々の課題のみではなく、サポーターの質や協会の準備運営能力を含め、日本サッカー全体のこうした未熟さを肌で感じた、現地でしか得られなかつただろう実感で、だからきっと、コロンビア戦終了のホイッスル直後に、悔し涙が止まらなかつたのだらうと思います。

長年、雑誌「サッカーマガジン」の編集に携り、記事も沢山書いてきた牛木素吉郎が今年上梓した、ワールドカップ舞台裏を記述した本に、「人間として生まれた以上は、一生に一度でいいから、サッカーワールドカップを現地でじかに体験するといい」、というくだりがありました。

今回図らずも、願ってもない幸運が重なったお蔭で、ブラジルW杯を現地で堪能できた幸せを改めて噛みしめながら、日本サッカーの果てしなく遠いしかしきっと輝かしい将来に対する熱い想いを込めて、ここに筆を擱きます。

2014年10月1日